



クレジットカードに電子マネー、おサイフケータイと、現金を持ち歩かないでお買い物ができるという、とても便利な時代となったようだ。これを「クレライフ」というのだそうだ。決して自慢できることではないが、私はいずれの物も所有してはいない。携帯さえ未だガラケーである。

その理由は明瞭で、今のところ何の不自由も感じていないからである。しかし、反面めんどうくさいと思うことは多くなってきた。買い物をする際、いちいち「何かカード」お持ちですかと聞かれることだ。ポイントが付くとか付かないとかどうでもよいから、その場でその分安くしてほしいのが本音である。携帯を持ったのも公衆電話が激減し、急な連絡に困ったことがあってからだが、携帯がなければ無いように済んでいったような事であったように思う。

今ではもうこれ以上の便利さは何も求めてはいない。

しかし世の中はこれで落ち着いてはられないのが常のようである。次々と新しい仕掛けが持ち掛けられ、今では無人化のコンビニへの移行が考えられているそうだ。IT革命とかなんとか言われ、それが豊かで明るい未来を象徴するかのようには思わされるのは「まっぴらごめん」である。

裏と表は表裏一体。便利な分だけ空恐ろしい事実が潜んでいることを忘れてはならない。世の多くの事件も裏を巧みに利用した事件が多いことに気付かされてくるのではないか。その対策から、その対策へ尽きることのない負の連鎖は続くことになる。 一変わらぬ幸せを願ってー

## ここにも戦時の一頁

K・W

同朋新聞(7月号)一頁に、『弱者は闇に消され 都合の悪いことは全て隠されてしまうそれが戦争なのだと思います。 金田 茉莉』さんの思いが東京スカイツリーの横に並んでいます。

八月十五日は、日本が太平洋戦争(第二次世界大戦)に負けた日です。本文で花田さんは、集団疎開の自分の体験を、戦災孤児の一人として綴られています。戦争が厳しくなった昭和十九年(1944)に入ると、東京・大阪・名古屋等大都会では、戦禍から学童を守るために学童疎開が始まりました。田舎に縁故のある学童は親せきの縁故疎開、その他の学童は学年ごとの集団疎開で田舎に移りました。

名古屋では109校・三万人余りの学童が東海三県に学童疎開しました。その疎開先に墨俣町も含まれて、名古屋市立愛知国民学校の300人弱の学童が、墨俣国民学校に集団疎開してきました。

学童たちは町内の寺に宿泊まりし、昼間の授業は、現在の小学校のプールの北側に平屋建ての校舎があり、そこで授業を行っていました。一日の授業が終わって、我々が下校するのを見る彼らの眼に光るものを見た子もいた。それを見て親元を離れて知らない土地で暮らす淋しさを子供心に感じたものでした。

ところで、集団疎開先に墨俣町が選ばれたのは、まとまって宿泊出来る寺があったからだと思えます。時代を遡って江戸時代には参勤交代という大勢の大行列があり、その折には390〜500人の宿泊場所が必要で、宿場町の墨俣では本陣・脇本陣の不足分は、お寺を『お開き本陣』と呼んで、大勢の宿泊をまかされたといわれています。

このころ、「コロナ」「コロナで大変ですが、今後集団疎開という言葉は聞かない世の中になければなりません。」 合掌



願い

# お盆について

今年もお盆の時期が近づいてきました。今年は「コロナの関係で、県をまたいでの移動が憚れることもあって、帰省したくてもできない人も多いのではないのでしょうか。

「お盆」には一般的には祖先の霊が帰ってくる時と受け止められ、亡き人を供養するためのお（仏事だ）と考えていますが、浄土真宗においては亡き人を「諸仏」といただき、私たちを人間として真実の生き方へと導いてくださる仏様だと受け止めさせていただいています。したがって私たちが亡き人を供養するのではなく、むしろ亡き人から悔いのない人生を歩んでほしいと願われているのです。

亡き人を大切に思う心は亡き人を「諸仏」といただくということなのです。

「亡き人を 案ずる私が 亡き人から案じられている」。

その受け止め直して生きるということができる機縁としての「お盆」であってほしいと思います。



秋季永代経 九月二十二日(秋分の日)

午前のみ 法話 住職

「コロナが未だ終息しない関係で、本年は午前のみのお勤めとさせていただきます。詳細は来月の案内でお知らせいたします。」

# 今月の掲示板

『苦悩の旧里は捨てがたく、いまだうまれざる安養の浄土はいいしからずそら』

親鸞聖人

苦悩の旧里とは申しますが、この世の中は苦悩の絶えないものです。しかしいかに苦悩が多いとしても、それを避けて通ることもできないのが現実社会に生きる人間なのです。したがって、その悲しい現実を引き受けて生きることにこそ、往生をめぐらした生き方になるということです。

つまり、夢も希望もない人生の中に、生きる意義を見つけて生きることを教えているのが、「往生」の教えだということになるわけです。

だから、現実で本当に困り、行き詰まった時にこそ、往生の教えのありがたさが実感されるのだと思います。

## 新「ナー」

十二回連載

樹林

自然は無言で、ありのままの姿を見せてくれています。その姿を通して気づかされてくることも多いのではないかと思われれます。

3回目

## 自然散歩

一面に広がる水田も、6月の田植え以来、分けつがすすみ、今では混み合う状態になりました。イネの生育にともなって、7月から8月への月境いは、大きな切り替えの時期にあたります。稲穂の赤ちゃんができる時期なのです。

7月までは草丈を伸ばし、分けつして体を大きくする事に集中しますが、8月へ入ると茎の先端に小さな稲穂の赤ちゃんができます。7月までは、栄養成長期といい、8月以降は生殖成長期と言います。つまり月境で生育相がガラッと切り替わるのです。8月からは稲穂を育てる事に集中します。

自然の仕組みの不思議が感じられます。



稲穂の赤ちゃん

## 新聞原稿募集

日常生活での気づきや発見、身近な話題をお聞かせください。旅行記でも趣味でもどんな内容でもご寄稿いただければうれしいです。

八月の学習会・光受寺茶話会はお休みさせていただきます。